

B—6 同一視野内に明るい光源のある場合の色 変調と色疲労（第2報）

岐阜大 中野みちお

1. 第1報ですでに各種の光源による色の見え方について報告したが、今回は第1に視野内を占める光源の位置、第2に視野内を占める光源の面積および数、第3に光源の輝きの程度、第4に目の順応状態等が考えられる。また、視野になるところの色の種類あるいはこれを照明するところの照度の問題などがあげられるが、本実験では主として、視野内を占める光源の位置、光源の面積また色標については、色標の種類および色標面の明るさを変えての影響を検討したので報告する。

2. 測定室は暗室とし、外部からの光による影響を避け、被験者は暗室に入ってから5分間安静にして実験にかかる。疲労度は退色疲労するまでの時間をもって表わす。片眼にて規定照度で退色疲労するまでの時間を測ったら次の規定照度に変え5分間休息して次の時間を測る。

3. 1. 眩輝光源のある場合、天然白色下では3色の退色時間を比較すると Blue, Red, Yellow の順に短い、眩輝の存在が各色の退色時間を短縮し Red がその影響を最も強くうける。

2. 眩輝光の作用は、眩輝光源の位置が近いときは強く、周辺部では弱く Red が低照度あるいは眩輝光が周辺部にある程 Yellow より退色時間が長くなる。

3. 周辺部に眩輝光源が移動した場合、しかも色標面照度が低照度の場合 Yellow より Blue の退色時間が長くなる。